

My plan for Japan – 英語で遺書を書いた国際人新島 –

宮庄 哲夫	同志社大学文学部教授
講師紹介【みやしょう・てつお】	【研究テーマ】 思想や文化における宗教の根源性とはたらき

はじめに

今日の授業は「同志社スピリット・ウィーク」のプログラムの一つとして公開授業になっています。私の宗教学の授業スケジュールが、ちょうどこの時期に「新島とキリスト教」というテーマになることから、同志社の建学の精神や新島の生き方に触れるスピリット・ウィークの一環として受講生以外の学生さんにも聴いてもらえれば、ということでお引き受けしました。受講生以外の方がどれくらい参加くださっているかわかりませんが、授業であることにはかわりませんので、いつもの講義資料のプリントとパワーポイント画面による講義スタイルでやっていきます。今日のテーマは、資料に書きましたように「My plan for Japan – 英語で遺書を書いた国際人新島 –」です。お話しできる時間は限られていますから、少し欲張りな資料を用意しておきました。資料全部をお話しできませんが、概略をお話しして、あとは自分で資料をじっくり読んでもらえれば、あるいは資料を手がかりに図書館や大学ホームページから入れるアーカイブ（新島遺品庫）などで自分で調べてみるきっかけになればと思っています。

青年武士、新島

早速授業に入ります。資料左側に新島の略年譜があります。まずは、簡単にそれを追ってお話していこうと思います。新島の名前は珍しい名前、資料にありますように、「七五三太」と書いて、「しめた」と読みます。一八四三年二月十二日に上州の安中藩（群馬県）の江戸藩邸で生まれました。今、いくつか新島に関するビデオがありますが、その中の一つに風揚げが好き少年だったというのがあります。狭い藩邸の庭から空に舞上がる風を見て、大空に、そして世界に羽ばたく日を小さいときから夢見ていた、と紹介しています。幕末の時代に、地方の小藩の江戸藩邸で、それも下級武士の家に育った青年、それが新島七五三太です。時代背景は、日本史を選択していなくても、幕末から明治維新にかけての歴史として大体皆さんお分かりだろうと思います。新島が生まれて十年後、黒船来航という事件が起こります。長い鎖国の時代が終わって、外国との関係ができました。ここで一気に飛びますが、青年新島はいろいろな書物の影響を受けて外国へのおこげを持つようになります。いくつか彼の遺した資料によりますと、函館へ行く前からアメリカへ行くことと決心していた、これが普通の解釈です。けれども、資料に紹介しておきました「MY YOUNGER DAYS」（私の青春時代）、これは後でお話しします二度目にアメリカに行ったときに、英語で自伝的に青春時代を綴った手記です。それを見ますと函館へ行くまではアメリカ行きはまだそれほど明確ではなかったように書かれています。その函館で彼はロシア正教のニコライという司祭と出会います。今でも函館にありますハリストス正教会、これは前にキリスト教の基本をお話した授業で、キリスト教の三つの流れの一つである東方正教会ですね。幕末に函館はロシアとの関係で開港しました。ロシアの領事館らしきものができて、そこにやってきたロシア正教の司祭がニコライです。この教会は現在、函館の観光スポットになっていて、十数年ほど前でしょうか非常に美しい姿で修復されました。小さい会堂ですが、いわゆるギリシャ正教、ロシア正教でアイコンと呼ばれる聖画像が珍しいです。このニコライは、後に東京にロシア正教の教会を建てます。昔は神田のニコライ聖堂と呼ばれて、観光バスが回る名所だったのですが、今はあまり訪れる人はないようです。明治大学や中央大学がある御茶ノ水駅の近くで、正式には東京復活大聖堂といえます。ですから、いわゆる東方正教会のキリスト教を日本に伝えた人と新島は出会って、彼から外国の事情や英語を教えてもらう、代わりに日本語を教える、そういうことを函館でしております。そしていよいよ一八六四年、新島二十一歳の夏、函館から国禁を犯してアメリカに渡航します。そのころの画像をいくつかお見せします。これはアーモスト大学で学んでいるときに、クラスメイトに脱国のときの装束を描いた絵と写真です。実は、新島はメモ魔で、そしてスケッチ魔です。非常にたくさんのメモや絵が残されていますから、こういうものを見ることができると、次は新島のちゃん髷姿が唯一遺されているものです。新島の肖像としてよく使われているもので、二十一歳の青年武士の姿ですね。脱国直前に撮った写真をもとに描かれた絵です。当時写真そのものが非常にめずらしいものでしたが、新島がどうして写真を撮るようになったのかということをお話します。

脱国直前の手紙

私は三年前にこのスピリット・ウィークと同じような内容の講演をしたことがあるのですが、テーマは「三度遺書を書いた男 新島襄」でした。もちろん本当に最後の遺書になったものがあります。それから今日のテーマの My plan for Japan というスイス・アルプスの山中で英語で書かれたものがありまして、この二つは間違いなく新島が遺書として書き遺したものです。しかし、私はもう一つ遺書があると考えています。それは、脱国の当日に故郷の両親に宛てて新島は手紙を出しているのですが、それは、文面からは函館で元気でやっているから安心して下さいという近況を綴った手紙ですけれども、書いている新島の心情をくみ取って読みますと、それは密航を前に死をも覚悟した惜別の手紙であり、遺書といってもいいものだと思います。これは大学の新島遺品庫に残されておりまして、便利なおこと、インターネット上で見ることができずから、ぜひ見ていただきたいと思えます。さて、新島直筆のこの手紙の真ん中よりちょっと右あたりに、少し大きな黒い字で「男児」という文字が見えます。その前後のところですが、「男児荷（いやし）くも」の前の行の下に、「ニコライの勧め」によってという表現ができます。先ほどのロシア正教司祭のニコライです。「私師匠ニコライ私に勧め、男児荷（いやし）くも四方（よも）の志をなせば、須（すべ）か）らく其身を寫し、家郷へ遣すべしと、呉々も申聞け、無代に寫眞致し呉候間、即ち捧呈仕候。何卒此寫眞を御眺め下され」とあります。当時、写真を撮ることは貴重な体験であったと思いますが、たまたま、ニコライさんのところで、無料で撮ってくれるということで写真を撮ったからそれを送ります、というわけです。「男児荷（いやし）くも四方（よも）の志をなせば」とは、よも四方の志、四方八方の四方ですから、世界へ出ていくという意味で読んでいいと思えます。ニコライさんから、世界へ羽ばたこうとするなら、写真ぐらい撮って家に送るべきだ、といわれたので写真を撮りました、ということですが、このいきさつそのものは、はっきりとは分かりません。ひょっとしたら、そういうチャンスに新島が無理矢理頼み込んで、自分でお金を出して撮ったかもしれない。この手紙の後のところを見ていきますと、自分は函館で元気にやっている。ついては珍しい写真を送りますから、それを見て私だと思って安心して下さい、と一応は近況報告になっています。しかし、実際にこの手紙を書いているのは、その夜、密航の願いに応じてくれた船に乗りこんで、国禁を犯して脱国するという命がけの一大事の数時間前なのですね。もちろん当時のことですから、これからアメリカへ行きますなんてことは書けません。そんなことが知られたらとんでもないことになります。本人のみならず一族郎党が打ち首か流罪になる可能性があった時代ですから。江戸から遠い函館にいるけれども、この写真を見て御傍にいるものと思ってください、というその言葉の裏には、これからは命がけで国を出ていく、ひょっとするともう会えないかもしれないけれども、どうぞこの七五三太のことを忘れなさい、この写真がいわば私の形見です、という思いが潜んでいるといついでいいでしょう。そうした新島の覚悟を秘めた遺書ともいえる手紙だということをはっきり示しているのが、資料の「MY YOUNGER DAYS」の中の箇所です。「脱国の手助けをしてくれる船長が見つかったので、慌ただしく出発の準備するわずかな暇を見つけて、ロシア人技師に写真を撮ってもらい、別れの手紙に添えて両親に送ることになった。そうすることによって私は両親に遠く離れた国、ひとまずアメリカに向けて旅立ったことを知らせた」と後に回顧している部分です。ですからこの両親宛の手紙は、文面そのものは近況報告の形をとってはいるけれども、真意は覚悟の別れの挨拶であって、その意味で遺書であったといえるでしょう。皆さんとそう年の違わない二十一歳の新島が国を脱出しようとするときに両親宛に書いたこの手紙をじっくり読んでください。

幸運な出会い

今画面に出ているのは、新島の希望をかえて函館から新島の密航を手助けたベルリン号のセイヴォーリー船長の写真です。セイヴォーリー船長は、後にこの密航の手助けをしたことが分かって船長を解任させられます。この船は上海までしか行きませんが、上海でアメリカへ行く船を捜してくれるということでした。そして上海からアメリカまで新島を乗せてくれた船がワイルド・ローバー号です。この写真はいろいろなところでご覧になるだろうと思います。この船の船主が、後に新島を引き取って十年に及ぶ勉学の面倒をみてくれることになる、アルフィーアス・ハーディーさんです。上海からボストンまでのワイルド・ローバー号の船長はテラーという人で、今出ているこの写真は随分とセピア色になっていますが、テラー夫妻の真ん中に新島の写真がはめ込まれています。テラー夫妻と新島との関係は、この出会い以降、実の子同様に家族の一員として迎えられたと新島は述懐しています。ボストンの近くにケープコットという岬があります。この辺は先ほどのセイヴォーリーさん、テラーさん、ハーディーさんも、家や別荘を持っている避暑地のようなところですが、休暇になると新島は彼らの家に招かれて家族の一員として生活を共にしています。そういう意味では新島という人は非常に無謀な行動をしましたが、極めて幸運といえますが、いろいろな人たちとの出会いが本当にラッキーだったということが出来ます。少しキリスト教的に表現すれば、そこに神の見えざる導きがあったのだといえるかもしれません。でも実に無謀ではありましたが、その素性の分からない密航者を引き取ってくれたこうした人たちとの出会いに恵まれ助けられたことが、今我々がここでこうして学んでいることを可能にしたわけです。そこには当時のアメリカの、とりわけ、ピューリタンの伝統が残っていたニューイングランド地方のキリスト教的な精神風土があって、それが密航の青年を自由に受け入れて、愛情をもって家族の一員とすることが出来る、またそれによって新島を大いに感化し、キリスト教精神に基づく学校をつくって、そうした人材を世に送り出したいと決意させていく、そういうスピリットが息づいていたということでしょう。この点については、次回の「新島の求めた自由」で詳しく取り上げる予定です。さて、このハーディーさんは船主ですからお金持ちで、ボストンの高級住宅街、ジョイストリートというところに、現在もその家は残っております。彼はハーディー家に引き取られて、希望どおり学校で学ぶチャンスを与えられます。

アメリカでの学生生活

次に新島の学生時代の写真をいくつか見てもらいます。アーモストのジョンソンチャペル、この左側にあるのは新島が入った寮ですが、建物そのものは今は違うものです。これは当時のアンドーヴァーの神学校です。こちらは現在の写真ですが、ニューイングランド地方と呼ばれるイギリスの影響を強く受けたアメリカ北東部の雰囲気を残した建物です。次は古い写真で、一八七五年ごろのアーモスト大学のキャンパスです。アーモストという町はボストンから車で二時間余りの、緑に囲まれた小さな小さな町です。私が行ったころは、四階建

上のビルディングはなかったように思います。そういう小さな大学町ですが、アーモストは総合大学のハーバードやイエールと違って、リベラルアーツカレッジとして、全米ランキングで常にトップクラスで、アーモストで学んだ学生のほとんどがハーバード、イエール、MITなどの大学院に進学するエリート校といっよい学校です。これも来週お話しする予定ですが、イギリスから渡ってきたピューリタンたちの教育機関として、まずは牧師を養成するための学校としてハーバードが造られ（一六三六）、ニューイングランドのピューリタンの伝統のなかでアーモスト（一八二一）が造られ、そして、そういう精神風土のところに新島は学がチャンスを与えられたということです。これが、新島が出会ったキリスト教です。資料の略年譜の中ほど、一八六六年に彼は洗礼を受けてキリスト教徒になります。その翌年アーモスト大学に入学します。一八六七年ですから、日本では大政奉還が行われ江戸から明治へと時代と体制が大きく変わっていくちょうどそのころ、新島はアメリカで大学生活を送っているのです。一八七〇年アーモスト大学を卒業しますが、資料に書きましたBachelor of Science, Bachelorというのは学士ですね。皆さんが文学部とか経済学部とか学部を卒業しますとBachelorという学士の称号をもらうこととなりますが、新島はアーモストで主に自然科学を専攻して、Bachelor of Science, 日本ですと理学部を卒業した理学士ということになります。おそらく間違いないと思うのですが、日本人で最初に正規に大学を卒業した人は新島だと思います。このころ、すでに幕末の時代から各藩の若者が欧米に留学しています。でもまさに明治維新直後の時代に正規学生として大学の課程を終えて正式に卒業した学生はおそらく新島だけではなかったでしょうか。もう少し後になりますと、そういう人たちがたくさん出てきますけれども、日本人初の大卒であるといっよいでしょう。そしてその後、アンドーヴァー神学校に入学してキリスト教の牧師になるための勉強をします。

岩倉使節団の通訳に

その神学校で学んでいるときに、ボストンに皆さんもご存じの森有礼がやってきます。森は岩倉具視の使節団の先ぶれとして、いろいろな準備をするために来て、使節団の通訳や世話をする若者を探しているわけです。先ほど言いましたように、すでに幕末のころから、各藩から若者がアメリカあるいはヨーロッパに送られています。新島も呼ばれて、そこで新島は、森を介して正式に留学生として政府から認められることとなります。画面に出ていますのは、「新島七五三太 米国留学申付候事」という正式の留学生としての書類です。これで新島は帰れて日本に帰ることができるようになりました。これがなければ、いくら国の体制が変わったとはいえ、勝手に出て行ったのですから、帰ることはなかなか難しかったと思います。次は教科書などでよく見る岩倉使節団の写真です。木戸孝允、真ん中に岩倉具視、後ろに伊藤博文、そして前には大久保利通など、維新政府のそうそうたるメンバーです。面白いことに使節団は皆洋服を着ているのですが、岩倉具視だけは和服でちゃん髷をまだ切っていませんね。この使節団に彼は通訳として、またアメリカの事情に通じた随員官という形で、アメリカ中を視察して回り、さらにヨーロッパに行く使節団にも随行することになります。国際人新島がアメリカから世界に羽ばたいていく時期です。このヨーロッパ視察は一年四ヵ月という非常に長い旅行になります。実は面白いことに、他の留学生たちはもちろん政府派遣のいわゆる国費留学生ですから、国の命令であれば当然仕事をしなければならぬ立場です。しかし新島にすれば、自分は国から一銭も貰っていないし、アメリカでの生活はすべてアメリカの人が面倒をみてくれている、ですから日本の政府からとやかく言われることはない、というスタンスです。神学校で勉強を始めたところから、初めは断っているのですが、やがてヨーロッパ行きを引き受けます。その際、新島は日本政府とちゃんとした雇用契約を交わしているのを画面で見てもわかります。新島をヨーロッパ視察旅行では、「三等書記官心得」として、「一日墨銀六弗」、アメリカドルで日給六ドルの「文部省理事官附属通稱」つまり通訳として雇います、という契約書です。一日に六ドルというドルの価値が今とどれくらい違うかわかりませんが、一年四ヵ月、約四百八十日あまりですから、三千ドル弱になりますね。こういう契約をして一八七二年、二十九歳の新島はヨーロッパ視察旅行に随行していきます。資料には、教育事情調査と書いて括弧の中に理事功程と書いておきましたが、これは新島がヨーロッパを視察している際に見聞したものをまとめたレポートです。これも新島全集のなかに入っておりますから、百数十年前の日本人新島がヨーロッパで何を見て、何に驚きや関心をもったのか、あるいはどういうものを日本の教育のなかに必要なと感じているのか、等々を見ることができます。今日の授業は一時間ほどでさっと新島の足跡をお話ししていますので、本当に小さな知識でしかないと思います。でも小さな知識が大きな関心を作るきっかけになります。資料末尾に参考文献をあげましたが、ぜひ私の授業の小さな知識から大きな関心へと広げていただきたいと思います。たとえばこの一日六ドル、今は違うといいますが、当時の三千ドルがどれくらいの価値があったか、調べてご覧になったら興味深いと思います。

ヨーロッパ視察旅行で

この一年四ヵ月のヨーロッパの旅を画面の地図で見てもらいましょう。船でニューヨークを出発して、まずアイルランド、それからイギリス、北はスコットランドのグラスゴーまで、エディンバラ、マンチェスター、ロンドンとイギリスを周遊して、フランスはパリに渡り、パリからスイスのジュネーブへ、という大ツアーです。さらにそれからドイツ入って、デンマーク、オランダ、そしてロシアのサンクトペテルブルクまで足を伸ばすという長大な旅行です。実はこの途中で、資料には取りあげませんでしたが、面白いエピソードがあります。パリからジュネーブへ向かう途中、彼は曜日を勘違いしていたのです。マコンという町があるのですが、ここへきたときに、翌日が土曜日だと思っていたら実は日曜日だったのです。翌日はそのマコンからジュネーブへ汽車で移動することになっていたのですが、なんと彼は、日曜日には私は旅行できません、と使節団の団長に言うわけです。日本からの使節団として旅行していますから、たとえば汽車の切符の手配なり、宿の手配なり、あるいは国境を越えるわけですから、そういうことも使節団ということで可能になっているのです。ところが彼は、明日は日曜日ですから、旅行することは私の良心が許しません、日曜日は礼拝をしなければならぬのですと頑と主張します。結局、一行はジュネーブへ出発しますが、彼は一人残ってこの小さな町でプロテスタントの教会を探します。フランスは大体カトリックなのですが、全くフランス語が分からないけれども小さな教会の礼拝に一人で出席します。そして後から一行に追いつくということをしているのです。今皆さんが、たとえば団体ツアーで外国旅行をしていて、どこかで私ここに残りたいからといっても、なかなかできることではないでしょう。たぶん、余裕もないですよ。全く知らないところで言葉も通じないし、切符の手配から宿の手配まで全部自分でしなければならぬ。彼はそれをしているのです。ですから、言葉が通ずる、通じないより大事な問題がそこにはあるのです。彼はその件についてアメリカのハーディーさんに手紙を書いています。そのなかで、私一人だけ残って小さな町で礼拝を守ることができたことが大変うれしい、と書いています。さらに、おかしなことにこの地方では日曜日に父親と子供が川で魚釣りをしている、母親は川で洗濯をしている、とも書いています。おどろき話みたいですが本当にそう書き送っています（全集七巻、英文書簡）。つまり新島が生活していたアメリカのニューイングランド地方では、日曜日は、彼が旅行を止めて礼拝に出たぐらいですから、遊んだり仕事をすることなどしないで、礼拝の後は家で静かに過ごす、いわゆる安息日厳守が常識なわけですね。ところが彼がフランスでみたキリスト教は、歴史的にはアメリカよりもはるかに伝統があるはずなのに、日曜日に魚釣りをしたり洗濯をしている、ドリンクサロンも開いている、と驚き怪しんでいるのです。彼が出会ったピューリタンのキリスト教の伝統についても来週とりあげますけれども、そういうエピソードも含めて一年四ヵ月のヨーロッパ視察旅行を終えて、アメリカに戻ります。そして翌年、彼は神学校を卒業して十年ぶりに日本に帰ってきます。

新島の大学設立運動

次は、最初の授業でふれた大学設立の旨意に関するものです。新島は一八七四年十月九日のある会合で、それは彼のような宣教師をアメリカから送り出す壮行会でもありましたが、彼は日本にキリスト教を伝えるために頑張ってきます。ではなく、日本にキリスト教主義の学校をつくりたいので募金に応じてください、と訴えたというよく知られたエピソードです。この画面は、大学のアーカイブにありますから検索してみてください。このときニドルから千ドルまで、計五千ドルの寄付があって、これがこの同志社の最初の基金になったこと、その後日本での大学設立運動のなかで、今度は日本中から同志を募って基金を集め、今日の同志社大学の基礎を築いていったことを以前お話ししました。同志社の同志は、最初の英学校のときには（山本覚馬と新島襄ですけれども）、ちょっと言いが悪いかもしれませんが、名も知らないアメリカの農夫のニドルから、日本の全国の、ひょっとしたら皆さんのお家の関係の方が寄付しているかもしれない。そういう多くの人たちの「志」を集めて建てられたのが、まさに「志を同じくする」「志学」「同志社」です。

少し端折りながら急ぎます。同志社英学校を大学にするという大学設立運動をしている最中に、彼はもう一度アメリカへまいります。そのときもアジアからヨーロッパ経由でアメリカに旅行をしますから、彼は二度にわたって世界一周をしていることとなります。資料の説明が一つ抜けました。この資料はアメリカに渡って一年後に日本に書いた手紙です。この二行目のところ、「小子儀不肖と雖も、國家に一分の力を竭（つく）さんと存じ、成業の爲箱櫃へ麗越（まかりこ）し候ところ」とあります。函館に行って勉強しようと思ったけれども、「風説とは雲泥の相違にて、格別仕るべき人物もこれなく」というわけで、勉強することを大儀名分にして彼は函館に行くのですが、先ほど言いましたようにそもそも函館に行くときからその気はない、むしろアメリカへ行きたい、外国へ行きたい、そのためには江戸から遠い函館が都合いいと考えていたわけです。そして運良く函館へ行く船に乗ることができました。そこでその次のことです。「且つ少年の狂気、業若し成らざれば死すとも難きを棄て、二十一年歳の新島が少年の狂気と書いておられますが、「生命に拘り候はん國禁をも恐れず、及び義す難き主君を棄て」、彼は藩主に仕える侍ですから、「義す難き主君を棄て、情わかれ難き親族をも顧みず」、アメリカに行ったということを変更して父親に書いています。この最後のところに、「全く國家のため」という言葉が出てきます。今日のテーマは My plan for Japan ですが、まさに「日本のために」という言葉、これが新島の最初の遺書も、二番目の遺書もそれから最後の遺書も、そして彼の大学設立運動にも、いわば彼の生涯すべてを貫いているキーワードであるといっよいと思います。

前後しましたが、彼はもう一度アメリカに渡ることになります。これにはいろいろな理由がありました。一番大きな理由は、新島は元々あまり身体の強い人ではなかったことがあげられます。大学設立は非常に多くの困難が伴いました。もちろんお金もいりますし、政財界の人たちとのコネクションをつけながら、そして彼は宣教師ですから牧師としての活動もしています。そういう非常に多忙ななかで何度も倒れそうになります。先に言いましたように、彼はアメリカのミッション（海外伝道団体）から日本に派遣された宣教師です。ですからミッションから、このままでは新島が本当に倒れてしまうかもしれないので、少し休養をとらせてはどうだろうか、ということだったようです。もちろん新島は大学設立運動の最中でその余裕はない、と受け入れませんが、大学設立には経済的な基盤も必要ですから、熟慮の末、再度の旅行行きを決断します。

ワルド派の町で

インド洋からスエズ運河を渡って地中海に入り、イタリアのナポリに上陸します。こちら二度目のヨーロッパの旅の始まりです。前回とは違って、今度は個人旅行です。イタリアではもちろんヴァチカン、ローマ・カトリック教会の大本山に行って、何人かの人と面談をしています。ローマの次はフィレンツェ、そしてピサの斜塔にも彼は登っています。その後、トリノという、イタリアの北部にある自動車産業やファッションで有名な都市ですが、このトリノの近く、四十五キロくらいですから近郊といっよいトレ・ベルチェという村に滞在します。新島はこのトレ・ベルチェに、なぜかこだわって行っているのです。そしてそこで四十二日間も滞在しています。これは極めて珍しいことですね。実はこのトレ・ベルチェという町は、十二世紀のヨーロッパで起こったキリスト教の刷新運動の一つとして後にワルド派と呼ばれる民衆の宗教運動があり、カトリック教会からは異端として弾圧されますけれども、そのワルド派の拠点の一つでした。イタリアといえばカトリック国ですけれども、北イタリアにはプロテスタントの地域も少しありまして、特にこのトレ・ベルチェは十二世紀以来ワルド派の町として今日までその伝統が続いています。資料や神学の研究施設などがあります。ワルド派は十六世紀の宗教改革の先駆的な運動であるといっよい捉え方もされます。

ですから、新島にとっては自分のキリスト教信仰に親近感のあるプロテスタント的なキリスト教信仰のルーツとしての関心を持ってわざわざここにきたのでしょう。宗教改革の先駆として知られているのはイギリスのウィクリフ、そしてポヘミアのフスですが、彼らの少し前にこのワルド派の運動があったということになります。新島は非常に几帳面な人ですから、どこかへ行くときにはきちっと計画を立てて旅行をしますけれども、この町についても彼はあらかじめ調査をして、そこでひと月以上滞在してその間にいろいろ勉強しようとしているのです。もちろん今度の旅行は休養ということも大きな目的でしたので、ちょうど六月から七月のヨーロッパはよい季候ですから、アルプス山麓の避暑地でゆっくりと休養したいということでもあったと思います。彼はここでひと月あまり過ごしている間に、かなり多くのメモを残していますが、その中の一つです。『現代語で読む新島襄』からの引用で、「人間の偉大さ」について書かれているものです。「人間の偉大さは学識だけでなく私心のなさに現れる。多くを学んだ者は、学んでいない者よりもむしろ自己中心的になりがちである。十字架上のキリストに目を向けよう。彼が私たちの模範である。ああ、キリストはなんと高貴で、なんと偉大で、なんと恵み深く見えることだろう。私たちが自己を忘れ、真と善の大義のために自己を惜しげもなく差し出そう。また真に悔い改め、謙虚になろう。私はこれを人の偉大さと呼ぶ」。新島のメモの中ではちょっと珍しく、信仰的な問題が書かれていますし、キリスト教的な人間という思想が出てきています。やはりこれは歴史的なカトリックの中心地イタリアを旅して、さらにそれとは異なるワルド派の町に滞在して、それぞれの伝統や生活、その信仰に直接触れるという多様なキリスト教との出会いをとおし、久しぶりに自由な時間を与えられてゆっくり静養するなかで、彼は改めてキリスト教信仰とは何であるかを自覚的に問い直す機会をもったということだろうと思います。イタリアを旅行しながら、カトリック的なキリスト教にはかなり彼は反発をしている様子もメモには残されています。そういうなかで、彼はキリスト教信仰、あるいは人間のあり方というものをより深く考えようとしているのですが、実はそれがこの直後に起こったアルプス山中での遺書の中に反映してくるのです。

アルプス山中を行く

新島は八月一日までトレ・パルチェに滞在し、そこからトリノに出て、汽車でミラノを経由してスイスへ入っていきます。イタリアへ上陸し旅の疲れを癒し、それからスイス、ドイツ、イギリスをまわってアメリカへ渡るという旅行計画でした。ミラノから北にイタリアとスイスの国境にあるのが、いわゆるスイス・アルプスです。いくつかのルートでこのアルプスを越えていくことができます。そのなかで特に交通機関として今でも汽車と車でアルプスを抜ける早いルートがサンゴタル峠というところ。ここは新島の時代にすでにトンネルが掘られていて汽車が通っているのです。もちろん、全部トンネルでなく、スイッチバックしながら登って行って、最後の所をトンネルで抜けるのですが、このルートを新島も選んでスイスへ行くことします。サンゴタル、ドイツ語で言いますとザンクト・ゴツタルで、聖ゴタルという聖人がこのルートを開いたという由来があります。このトンネルを抜けてスイス側に入ったすぐの所に、アンデルマットという小さな村があります。新島の時代でもそうだったのですが、アルプス山中にある、いわゆるリゾート地です。新島はこういう所をよくよく調べて旅行しています。おそらく土地の人からいろいろと情報を得たのだろうと推測されます。イタリアで、これからスイスに行くのだけれども、どこへ行ったらいいだろうか。当時は「地球の歩き方」のようなガイドブックがあるわけではないので、直接的なコミュニケーションをとりながら旅行しているということが分かります。アンデルマットのような小さな村を、初めて旅行する日本人が行くなんてことはまず考えられません。このアンデルマット村の標高は千五百メートル弱です。村の三百メートルほど下をトンネルが通っています。画面の山の写真、ここにつづれ折の道があるのが見えますでしょうか。トンネルができる前はもちろん峠を歩いて越えていたわけ、つづれ折りの道がずっと続いています。この下の村がアンデルマットですけれども、新島はそこに宿を取って、たまたま宿したドイツ人と次の日に山登りに出かけるのです。今こそスイス・アルプスでの中高年のハイキングとかトレッキングなどがちょっとしたブームですが、百二十年前に日本人新島がアルプスをトレッキングしているのは、格好いいですね。しかも、たまたまではなくて、新島はミラノでちゃんと登山用の杖を買っています。ですからスイスへ行ったらアルプスへ登るといって行っているのです。それにおそらく先ほど言いましたように、トレ・パルチェで滞在中に地元の人からアルプスへ登るなら山を越えたアンデルマットへ行ったらいい、という情報をもらっていたことだったのではないのでしょうか。ユングフラウへ行ったら、あるいはアイガーへ行ったらではなくて、アンデルマットがおすすめ、ということまでやってきたのでしょう。写真はその山です。先ほどの写真のように遠くから撮るとわりと緩やかそうですが、近くで撮った写真ですからかなりの急勾配です。道路も右に行き左に行きながら少しずつ登っていきます。峠の高さは二千メートルで、村があるところは千四百四十メートルですから、約六百メートルの標高差を登るといっては結構なトレッキングです。彼はドイツ人と一緒に登っていきます。これは峠の写真で、この標識を見るとよく分かると思いますが、右の方へ行くとルツェルン、チューリヒというスイスの大きな町です。左へ行くとミラノ、ペリントナーナ。ペリントナーナはちょっとマイナーだけでも、ミラノはわかりやすいです。ですからこの峠は、イタリアのミラノ、スイスのチューリヒという動脈の大きな分岐点なのです。そこを目指して登って行こうとしたのですが、その途中で彼はどうも心臓の具合が悪くなったといって、同行したドイツ人に先に行ってもらうことにします。予定では、ドイツ人と一緒にアンデルマットから峠を越えて、イタリア側のアイロロという町へ降りる計画でした。それほど健脚でなくとも充分一日で歩ける行程ですが、突然の心臓の発作にみまわれて、新島はようやくのことで峠にあるホテルに何とかたどり着きます。写真はそのホテルで、ホテルの名前は替わって経営者も替わっていますけれども建物そのものは同じものが現存しています。ここで新島は遺書を書いたのです。この写真は私が二回目に行ったときのもので、一九九七年九月と日付が出ていますが、九月でしたけれども、結構寒かったですね、やはり二千メートルを越えていますから。新島が行ったのは八月ですからそんなに寒くなかったかもしれませんが、二千メートルを越えるところで、高山病にかかったのかどうか分かりませんが、多分不整脈のようなものだったのではないのでしょうか。これが第二の遺書を書いたサンゴタル峠のホテルです。この写真はホテルがある峠の少し高台から撮ったものです。私はバスで行きました。アンデルマットからアイロロまで、峠を越えて行くバスが走っています。最近、イタリア側のアイロロからは観光用の馬車もあるようです。

サンゴタル遺書

さて、いよいよ「サンゴタル遺書」です。英文のヨーロッパ旅行メモをその下につけてありますが、上の段落の、アーメン、アーメンまでのところ、これが峠のホテルのベッドで持っていたスケッチブックの画用紙二枚に英語で書いたものです。当時のイタリア・スイス国境の山の中のホテルですから、ほとんど英語も通じなかったといってもいいだろうと思います。しかし、日本語で書いたらそれこそどうにもなりませんから、彼は英語で遺書を書いたわけです。この画用紙に書かれた英語の遺書は、後に新島が大切にしたいということで保存されて、大学の同志社社史資料センターに入っています。これも同志社社史資料センターの写真からここに写し出しているもので、インターネットで御覧になることができます。全文は新島全集七巻の百九十六ページ以下のところに収録されていますので英文で読むことができます。先ほどトリノの近郊で四十日ほどゆっくり静養していたことをお話ししましたが、そのときに知り合いになったトリノのプロテスタント教会の牧師さんの名前が出てきます。自分がここで死んだら、ぜひそのトリノの牧師さんに連絡してほしい、彼が私のことを知っているから。そしてアメリカのハーディーさんに電報を打ってほしい、とあります。これは私が線を引いたのではなくて、新島自身が線を引いているのですが、アルフィーアス・ハーディーという名前が書かれているのが見えるでしょう。私のアメリカの恩人であるハーディーさんに電報を打ってください、お金は麓のアンデルマットに置いてきてあるので、それをつかってほしいとか、遺骸はトリノの牧師さんのところに送ってほしいとか、自分の髪は切って、日本にいる愛する妻八重さんに送ってほしいとか、そういういわば普通の遺書としての文言があります。しかしそのなかに先ほど言いましたトレ・パルチェで自覚的になったキリスト教信仰ですね、そういう文言がこの遺書には書かれています。もう時間があまりありませんので、先ほど言いました小さな知識が、大きな関心を呼びますように、ぜひ自分で読んでいただきたいのです。画面の二枚目、矢印のところですが、ここに資料でも少し太い活字にしておきましたMy plan for Japan will be defeated. という文があります。「日本のための私の計画は、挫折するでしょう」、自分がここで死ねばということですよ。「でも神が私に代わって日本のためにたくさんのお金をしてくださっている。そのことを感謝したい」と続いています。このころの新島のMy plan for Japanは、具体的には、英学校を大学にすること。と同時にこのヨーロッパ旅行から帰って翌年に新島は同志社の分校を作っています。同志社が分校があったことをご存じですか。仙台に宮城英学校というのを作ります。翌年、それは東華学校という名前になるのですけれども、同志社の分校です。資料の旅行メモには、My plan for our school. My plan for a medical school. とあります。新島は、日本に私立のキリスト教の学校を作りたい、医学校も作りたい、等々いろんな計画をたてていました。それは京都だけでなく、日本の各地にそういうものを作りたいということであって、その一つが仙台の分校です。この英文メモによりますと、一日休んで何とか回復したので、汽車に乗って先ほど峠の標識で見ましたルツェルンという町へ行ったらとあります。そこで医者に診てもらって、どうも君の心臓はよくないと診断されるのですが、まあ一応小康状態になります。このルツェルンの宿で、アルプスの山の中で起こったことを詳しく英文で書いたものがこの文章です。これも『現代語で読む新島襄』の中に入っていますので、ぜひ読んでください。

「日本のための私の計画は・・・」

さて、遺書の部分を少し拡大してみますと、My plan for Japanというところからwill be defeated. But thanks to the Lord that he has done so much for Japanという文章が続いていて、一番下の行のところ、He will yet do the wonderful work there. ですから、「日本のための私の計画My plan for Japanは挫折するでしょう。しかし私たちのために既にこれほど多くのことをなされた主に私は感謝をする。主は日本においてなおも驚くべき御業をなされると私は信ずる。主が愛する祖国のために多くの真のクリスチャンと気高い愛国者を産んで下さいますように。アーメン、アーメン。」これがこの遺書の最後です。ここにも、日本のための、あるいは最後の行にありますように、愛する祖国のための、という言葉が出てきます。あるいは、これはその下の、ルツェルンで書いたメモの一文ですけれども、私は日本のために多くの計画を立てていた。先ほど言いました分校を建てる、あるいはそれを全国に広める、大学にする、医学校を作る、と多くの計画を立てていた。そして今、自分はこういう状況になってしまったけれども、神様はもっと日本のことを心に決めていて、この国の未来に神様が誤りのない働きをしてくれる。そのことに私は謙虚に身を委ねたい。あの山中で遺書を書いたとき、そういうふうと考えていたのだと記しております。

新島は峠のホテルで一晩横になって、胸のところに辛子を塗ったと書いています。薬がないのでマスタードを塗ったのですね。きっとそれでカーッと刺激があって心臓がちゃんと動き出したのでしょうか。翌日、彼はイタリア側のアイロロから馬車呼んで、それに乗ってアンデルマットに戻ります。この後スイス、ドイツを経てイギリスに渡り、そしてアメリカに行くと、再びハーディーさんやあるいはアーモストの学友や先生たちと会うという、第二の故郷への里帰りをしています。そのアメリカから日本にいる八重夫人に送った手紙を資料に引用しておきました。これも最初のところに、「この身を主基督に捧げ、かつ我が愛する日本に捧げたる妻となられし御身ならば」と日本のため身を捧げた自分の妻になったのだから、といいます。だから「なにとぞ夫の志と、かつその望みを」察して「少々の事に力落とさず・・・己を愛する者のために祈るのみならず、己の敵のためにも熱心に祈り、またその人々の心の改まるまでもそのために御尽しあらば、神は必ずお前様の御身も魂までも御守りくださるべし」と続きます。新島と八重夫人との信仰的な絆の強さを感じます。自分の奥さんこういう手紙を書けるかということ、なかなか気恥ずかしくて書けませんが、こうした文から新島の確固たる信仰をうかがい知ることができそうです。その翌年アメリカから日本に帰国するのです。一九八五年の十二月です。帰国して一週間後、今出川にありますあの重要文化財のチャペルの定礎式が行われています。その礼拝で、帰国後間もない新島が説教をしています。その中であのスイスでの遺書のことをとりあげています。先ほどから何度も言いますが、トレ・パルチェで改革的なワルド派の純朴な信仰に触れ、しばしの休養のなかで、ある意味で信仰の自覚的な深まりに達していたといえます。しかしその直後、スイスの山の中で思いがけない発作に襲われて、もはやこれまで、My plan for Japan will be defeatedと挫折しかかりながらも、奇跡的に回復して予定どおりアメリカに渡って多くの親しい友人や恩人たちに再会、また大学のためのいろいろな準備をして帰ってくることで

きました。神に導かれてきた不思議な自分の人生の思いのたけが、この礼拝堂の定礎式で新島の口から語られているのです。この建物をご覧になるときに、どうぞそのことを思いながら見てください。建物の空気には、その空気を味わった多くの人たちの思いが込められているといったらいいでしょうか。そんな雰囲気というか、空気感のようなものが、あの歳月を経た重厚な建物にはあるように思えます。そして新島のスイス山中のMy plan for Japanを味わってみてください。

同志社のスピリット

最後に、いわゆる本物の遺書について時間の許す限り簡単に触れて終わりにします。資料に書いておきましたが、「真正の自由を愛し」というのが欄外に出てきますけれども、やはり新島が同志社を建て、日本にキリスト教主義の教育をするという My planの要はここにあるとっていいのではないかと思います。「?儻不羈なる書生」とか、有名な言葉がここには出てきます。同志社の将来は、「はつらつたる精神力があつて真正の自由を愛し」、それによって国に尽くすことができる人物の養成に努めること、こう願われています。最近の愛国心だとか、伝統をなんとかということとは違う意味で、新島は日本のことを真剣に考え、愛していたと思います。My plan for Japanであるキリスト教主義の学校、私立の学校を作る計画、それが目指したものはなにか。新島の言葉をそのまま借りれば、「真正の自由を愛し、自由自治の精神に生きる人間」を養成したい、日本の若者にそういう教育をしたい、という願いをこの同志社大学は新島から受け継いできています。その意味で私たちの責任は本当に重いと云わざるを得ませんが、皆さんも同志の一人として同志社のスピリットを味わい、受け継いでいってほしいと思います。今日は同志社スピリット・ウィークということで、私の授業を登録していない方もおられるようですが、来週もこの授業は公開しておりますから、どうぞ来てくださって構いません。授業は基本的に公開ですから。来週とセットで新島のことを学んでいただければと思います。大変駆け足になりましたが、今日の授業はこれで終わります。

二〇〇六年六月十二日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録